

## 芥川だより

発行日\*2020年10月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp  
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸  
印刷・発行 下村嘉明  
〒661-0951  
尼崎市田能5-3-10-601  
☎090-8796-8624

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*



## 根強い政治へのアレルギー

安倍政権から菅政権に変わったら支持率が急増したとマスコミは伝える。菅さんは安倍政権の継承を約束し二階幹事長の留任を認め総理になったという。看板が変わっただけで、簡単に支持率が上がるというのは、どういう事なんだろう？

街で見かける閉店セールというのがある。閉店はしないのだが、閉店セールという安売りのイメージを客に与えて売りさばくインチキ商法である。しばらくすると看板を変えたり名前を変えたりする。やっている中身は同じなのだがいかにも

新しい店のように模様替えをする。客もその辺は承知しているのか、近所の人はあまり寄り付かないが話好きな婆さんたちは通うようになる。店の商売人はあの手この手で年寄りの懐から金を引き出す。

この芥川だよりに政治関係の記事を掲載したら、熱心な愛読者だった先輩から「政治の事を書くんだったら、もう読まんから送ってもらいでよい。」とお叱りともとれる電話をもらった。先輩は裕福な地主だったから政権批判がよほど気に食わなかったのかもしれない。一方で、革新的と思われる人からの声はなしのつぶてで何の反応もなかった。むしろ、政治的な事柄を避けたいという意向が感じられた。

政治を論じるのに慎重を要する風土はどこから来たのだろうか？敗戦を契機にアメリカのご機嫌伺いに慣れっこになり、いつの間にやら政治のタブーが出来てしまったのだろうか。そうだとすれば、アメリカは見事な占領政策をやってきたことになる。「生かさぬよう、殺さぬよう」という江戸時代の徳川幕府の政策を研究していたのかな。

アメリカ大統領選挙の様子をテレビで見るたびに、日本の首相選挙の不可解さがこみあげてくる。黙ってみている国民も、よく飼いならされた犬のように思える。誰がやっても同じや、変われへん！。諦めとも思える言葉だが、それはあくまで保守党政権内での政権交代の事を言っているのであって、革新政党との交代を意味していない。安易なイメージで判断する傾向は、政治へのアレルギーの裏返しで政治が成熟しない原因でもある。

死をめぐるあれやこれ(71)

菅政権の正体

石川 吾郎

ウソとゴマカシの安倍氏がようやく退いて菅政権にとつて変わったが、これ、アベ政権のすべての政策を受け継ぐと初めから宣言をしている。内閣支持率が三十%から七十%に跳ね上がったのには驚いた。無理もない。マスコミはニュースで我々が直接関与できない自民党の総裁選を毎日流し続け、首相決定後は「苦労人」だの「パンケーキ好き」だのといった情報をタダで宣伝し続けたものだ。◆スガという人物は笑顔の似合わぬ不気味な風貌からも想像できるように、非常に危険な人物だ。アベ政権でNHKや民放に圧力をかけてまっとうな政権批判をするキャスターを引きずり降ろしてきたのが正にスガ氏だという。内閣人事局で幹部官僚の人事を支配し、付度官僚ばかりを重用し、批判する者を左遷しているのも彼だ。その政策も中小企業を潰して淘汰させ、大企業や海外企業に利便を与えるといった国民を貧困化させる内容のもの。◆そしてまた、政府から独立した立場で政策提言をする「日本学術会議」が、新会員として推薦した候補者のうち六人をスガ首相が任命拒否をした。六人は安保法制、特定秘密保護法、辺野古などで政府に異論を表明していた学者。法的に任命権者は首相にはなっているが、これまで推薦された人物が拒否をされたことはこれまでなかった。マスコミだけでなく自由であるべき学

問の世界に圧力をかけるスガ内閣の本性は、戦前の思想弾圧を思わせる。◆政権の標語「自助・共助・公助」が、本来政府が行うべき「公助」を最後に掲げるのは、政府の役割を放棄すると宣言しているのに等しい。この人物、安倍氏とともにこの地位に最も相応しくないといいよ。



芥川だより一六五号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム71	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳79	坂本一光	2
哲学翁いの時事放談29	祖蔵哲	7
大峰奥駈道35	下村嘉明	9
大人の今昔物語72	石川吾郎	10
新型コロナウィルス愚考(6)	明石幸次郎	11
オクラの山たより49	因了生	12
隠された歴史24	満田正賢	16
道をゆく18	成瀬和之	19
編集後記	S K 生	19
ふみの道草28	山椒魚	20
俳句	土田裕 影山武司	20

素老人☆よもだ帳(79)

坂本一光

◆ありふれた奇跡・水の話をしよう

冬は氷。氷が水に浮くも、をかし

(特別編)

はじめに

『春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は、夜。月のころは、さらなり。闇もなほ。蛍の多く飛び違ひたる、また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。雨など降るも、をかし。秋は、夕暮れ。…冬は、つとめて。…』

清少納言『枕草子』冒頭の一節である。

「をかし」は、おもしろい、興味がある、趣があるなどの意味で肯定的に使われる言葉。『枕草子』には、自身が関わり観察した宮廷の日常生活や自然のあれこれが綴られている。肯定的で明るく、理知的な精神がある。彼女にもし水に関するほんの少しの科学的な知識があったとすれば、「冬は氷。氷が水に浮くも、をかし」と書いたはずだ、と思ったりする。

さて、水は、空気とともに最も身近に存在するありふれた物質であり、生命維持に不可欠である。しかし、普段は、雨が降れば恵みの雨と思うよりいやだなと思うこともある。井戸や川などから水を汲んで運ぶこともなく、水道の蛇口を回せば水は出

る。ありふれた水に理知的な目を向けることは、日常、まずない。水は、あまりにありふれた、あたりまえの存在である。

しかし、水は、それと類似した物質や、それと同じように小さい粒子から成る他の物質と比較してみれば、決してあたりまえでない、たまたものではない不思議な性質をもっている。水の特異性とよばれる性質である。ありふれた水と水にまつわる話をしてみようと思う。

1 水の不思議な性質―氷が水に浮く

水の不思議な性質は幾つかある。その一つは、氷(固体の水)が水(液体の水)に浮くことである。どんな物質でも、その固体はその液体に沈むのが自然ではないだろうか。いや、沈むべきではないかな。

なぜなら、固体は液体よりも構成粒子が密に詰まっているはずだからだ。しかし、ある物質の固体がその液体に沈むという光景を目にする機会は、日常でまずない。0℃から100℃の日常的な温度範囲(これらの温度自体が、1気圧下で水が凍り、また沸騰する温度として定義されている)で固体・液体・気体という物質の三態を見ることのできる物質は水以外にないからである。ただし、一言触れておくけれども、お湯を沸かしたときに出る湯気や大気中に発生する霧は水蒸気ではなく、微小な水滴の集まった水である。水蒸気は無色透明で目に見えない。

日常の温度範囲では、ほとんどすべての

物質は、固体か、液体か、気体のいずれか一つの状態でだけ存在し、固体が液体に沈む光景を見ることはない。少し温度範囲を広げれば、固体と液体、または液体と気体で存在するものがある。たとえば、食塩(塩化ナトリウム)中に陽イオンとして存在する固体の金属ナトリウムは1気圧下では98℃で融けて液体になり、880℃で沸騰し気体になる。アルコール類の間で、発酵品を酒として飲んでる液体のエタノールは、1気圧下ではマイナス114℃で凍り、78℃で沸騰する。しかし、金属ナトリウムは実験室にしかない物質であり、マイナス114℃は非日常的な温度だから、これらの物質の固体が液体に沈むのを目にすることはないのであろう(注1)。

なお、固体が液体に浮く物質が水以外にはないかと言うと、実はあるようだ。たとえばケイ素。砂粒に含まれる成分であるケイ素は1410℃で融け、見たことはないが、融けている間その固体は生じた液体に浮いているはずである。ケイ素以外にも2、3の日常目にするのではない特殊な物質が知られている。いずれにせよ、普通に知られている物質の中で固体がその液体に浮く物質は水だけであるといつてよい。

氷の密度は、水の密度(1.0g/cm<sup>3</sup>)あたり約1gに比べると、およそ1割も小さい。だから氷は水に浮くのであるが、固体が液体よりも密に詰まっているとはいえないとどういうことか。これについてはあとで触れることにしよう。

水は、ありふれた存在物でありながら、固体が液体に浮くなどという固体にあるまじき振る舞いをする。この一点だけからみても、水はただものではない。

## 2 温度と圧力が物質の状態を決めることなど

ある温度で物質が固体・液体・気体のどの状態であるかを考えるとき、その物質はある一定の圧力下で密閉状態に置かれていたものとする。通常1気圧の下で固体が融けて液体になる温度を融点、液体が沸騰して気体になる温度を沸点と呼んでいる。さて物質というのは変なもので、温度と圧力が決まると、その温度・圧力下でその物質が固体・液体・気体のどの状態であるかが、物質ごとに固有の性質として一義的に決まっている。同じ物質でも、圧力を変えれば、融点も沸点も違ってくる。たとえば、地上より圧力の低い山の上では、水は100℃よりも低い温度で沸騰し、普通に米を炊いたら芯が残り硬くて食えないことになる。

ちなみに、標準大気圧である1気圧(101325hPa(厳密に)、hPaは天気予報でおなじみのヘクトパスカル、Pは数を表す接頭語で100倍のこと)とは、1cmあたりに約1kgの重さがかかっている圧力である。10mの水柱を考えると、断面積1cm<sup>2</sup>当たりの水の重さは1kgである。水に10m潜れば、大気と水による圧力を合わせて2気圧が身体にかかることになる理屈。

ついでに言えば、大気圧が1気圧とはどういうことか。地球が持つ空気の大半分は地表からの高度10数kmの対流圏に存在する。地表は、いわば“大気の世界”の底である。

さて、固体や液体が気体になるとその体積はおおざっぱに言って1000倍以上になる(ドライアイスを密閉容器に入れてはいけない、気体になれば容器が破裂するほど圧力は高まる)。すると、気体である大気の密度はおおざっぱに言って水の1000分の1である。10mの水柱が1気圧をもたらしたから、およそ水の1000分の1の密度を持つ大気であれば10mの1000倍の大気柱が1気圧をもたらすであろう。10mの1000倍は10kmである。1気圧の大気圧というものは、およそ10kmの大気柱の重さによる圧力である(注2)。

### 3 水の特異性はまだある

さて、水が水に浮く、いとおかしく、いと不思議で、いとまれなる現象を、私たちはただありふれた、あたりまえの光景として目にし続けている。水が水に浮く何の不思議もないけれど、この現象は水の特異性の最たるものの一つである。

水の特異性はまだある。水は、あらゆる物質を溶かすことができる万能の溶媒である。溶媒とは、その中に何かの物質を溶かす液体のこと。量を問題にしなければ、コップに入れた水はその瞬間からガラスを溶かし始めている。水は、多くのさまざま

まな物質をよく溶かし、その流動性によってさまざまな場所に物質を運び、物質と物質の出会いによる化学反応の場を与え、反応とはある物質が別の物質に変化することであり物質はそれに固有の化学エネルギーを内包しているから反応にはエネルギーの出入りが伴い、結果として反応によってエネルギーが運ばれたことになる。生命を支える物質代謝、すなわちエネルギー代謝に水は決定的に重要な役割を果たしている。この水に何の毒性もないとは、驚きと感謝の言葉を知らない。

また、水は他の物質には見られないほどに強く、互いにつながる。これも水の特異性の一つである。その結果として、水は熱しにくく冷めにくい物質の代表である。温度が高いと、大きっぱに言って、粒子間のつながりがゆるんでいる。水が持つ強いつながりをゆるめるにはエネルギーが必要であり、多量の熱を加えなければならぬ。逆に、高温から冷めていくときには、一度ゆるんだつながりがだんだんと元のようになり強まっていく。そのとき、つながりをゆるめるのに必要であったのと同じ量の熱が放出される。水の融点・沸点(それぞれ1気圧下で0℃・100℃)も異常に高い(注3)。

水は互いに強くつながっているから、蒸発するときには周りから大量の熱を奪う。水のこの性質は、地球の表面の7割以上が海であることも加わって、地球を穏やかな熱平衡状態に保つのに役立つ。

構成する粒子間のつながりが強い物質は、外界である大気と接するとき、できるだけ表面積を小さくしようとする。その性質の指標となる表面張力も、水は水銀やナトリウムなどの液体金属に次いで非常に大きい。丸い水滴になるのはそのためである。水につながる性質は、土壌が水分をよく保持すること、数十mの高さの木の梢までも水が吸い上げられることなどの理由の一つである。さらに、水は互いにつながって、まるで意志ある一つの生き物のようにさえ振る舞う。東日本大震災のとき、映像でみた恐るべき津波の姿は象徴的であった。

水の基本粒子は、直径1億分の3cmほどのほぼ球状に近いものである。ちっぽけな存在であることは人に似ている。しかし、人と違って個性はなく、一つ一つの粒子を性質の違いで区別することはできない。しかし、人と違って、先に述べたように、どんなときにもどんなところでも互いによくつながっている。これは何かを縛り付ける意味での絆(ほだし)によるつながりではない。言ってみれば、個性によらない、対等で平等な粒子間の等価的なつながりである。人が自然から学ぶべきものの一つでもある。

### 3 なぜ水は水に浮くか

水の基本粒子は、よく知られているようにH<sub>2</sub>Oと表記される水の分子である。Hは水素原子を、Oは酸素原子を示す。1個の

水分子は2個の水素原子と1個の酸素原子から構成されている。普段見ている水はこの水分子が無数に集合したものである。水の溶解能力や固体が液体に浮く特異性には、他の物質の基本粒子にはみられない水分子自体に固有の性質（電気的陽性の強いHと陰性の強いOから成り、HO-Hの角度が104.5度と折れ曲がっているため、水分子は極めて強い電気的極性を持つ）とそれに基づく水分子・水分子間に固有の結合の仕方が反映している。そのことをみてみよう。

図1に水分子の外形（注4）を示す。水分子は直径がおよそ300 pm（1億分の3 cm、pは数を示すときの接頭語のピコで10<sup>-12</sup>）の球形に近い形をしている。

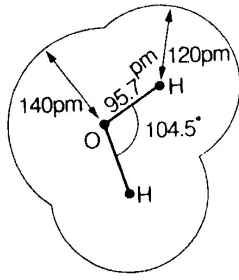


図1 水分子の外形

水分子は電気的な極性を帯びた分子であり、2つの水素原子上に正電荷が、その間にある酸素原子上に負電荷が高い密度で局在している。

さて、水分子を球状の粒子と見なしたとき、最も密になるように並べてみよう（図2）。

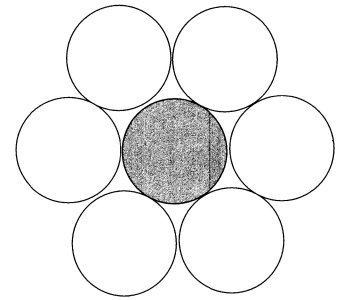


図2 球状の粒子を最密になるように平面状に並べる

このとき中心の黒い球に注目すると、そのまわりの6個の球に接していることがわかる。

次に、図2のように並べた粒子の上に粒子を並べる。このときは、図3のように、図2の平面上で球と球の接した部分のくぼみの上に球を置く。

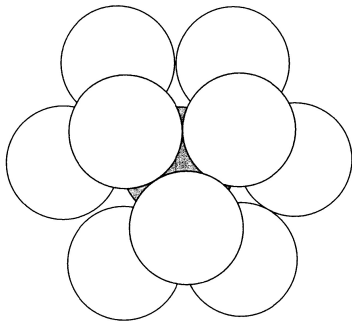


図3 図2の球の配列の上に、また平面上に球を並べる

ここで黒い球に注目すると、図2のように同じ面上でまわりを6個の粒子に囲まれ、図3のようにその上の面に並ぶ3個の粒

子にも囲まれている。さらに、図2の面の下にある3個の粒子にも接することになるから、結局、黒い球はまわりを12個の粒子に囲まれることになる。どの粒子もそのまわりを12個の粒子で囲まれる構造は、粒子が最も密に詰まった構造である。多くの金属結晶や電気的な極性を持たない小さな分子からなる分子性結晶などは、このような結晶構造を取る。このように最も密に詰った固体は、その詰まり方がゆるみ膨張した自らの液体には当然沈むであろう。

しかし、水はそうではない。図4に、1gの水と水の体積の温度変化（注5）を示した。

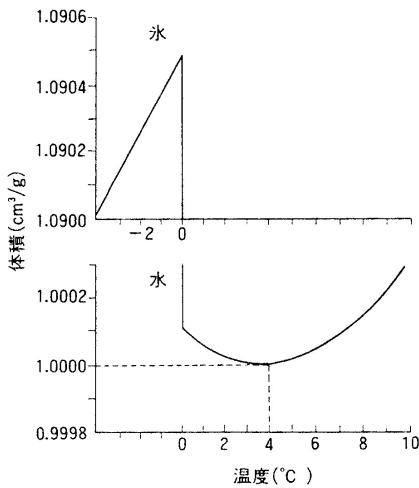


図4 1gの水と水の体積の温度変化

0°Cで、1gの水の体積は1.0905 cm<sup>3</sup>であるが、水の体積は1.0001 cm<sup>3</sup>である。水が凍ると9%も体積が増加することがわかる。水が水に浮くはずだ。水分子はほぼ

球状であるにもかかわらず、水では、水分子がそのまわりを12個の分子で囲まれるような最密な構造になっていないようである。

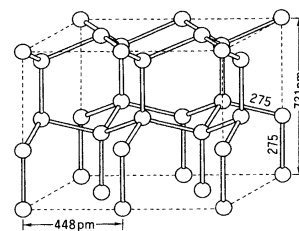


図5 氷の構造

（○印は水分子の酸素原子の位置）

氷の構造を図5に示す（注6）。図中の○印は水分子の酸素原子の位置を示している。どの水分子もそのまわりを、最密構造の時の12個に遠く及ばない、わずかに4個の水分子に取り囲まれているにすぎないことがわかる。氷の構造は、言ってみれば「スカスカ」なのである。

次に、図5の氷の構造中で、ある水分子がそのまわりを4個の水分子に取り囲まれている部分だけを抜き出して示したのが、図6である（注7）。氷をつくる水分子中の酸素原子が、正四面体の4頂点（1）-（4）と中心（重心）を占めるような構造である。頂点と重心の距離は全て等しく、図6中に太い実線で示した水分子内のO-Hの結合距離と、細い破線で示した隣接する



2つの水分子間のH...O距離の和になつてゐる。ちなみに、正四面体の角度(頂点・重心・頂点)はおおよそ109.5度であり、角度(H-O-H)の104.5度に近い。また、水分子間のH...Oの結合(⋯)は水素結合と呼ばれるものであるが、水素結合は180度の方向が安定で強い。水中の図6に示した構造が正四面体構造になる所以である。水の構造は「スカスカ」であると言つたが、球状粒子が正四面体構造で空間を満たしたときの空間の充填率は34%である。一方、先に述べたような、球状粒子がそのまわりを12個の球状粒子で囲まれたような最密な構造を取ると、空間の充填率は74%にもなる。

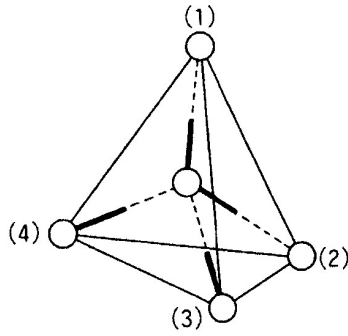


図6 氷における最近接水分子の配

(○印は水分子の酸素原子を示す)

11)で、図4をもう一度見ていただきたい。0℃の氷が融けて0℃の水になると体積はおおよそ9%減少するが、その後温度が

上昇しても4℃までは体積減少が続くことがわかる。大きっぱに言えば、氷が融けるとき氷の正四面体構造が崩れて水分子間の距離が縮まることがこの体積減少の原因である。この効果は、4℃まで続く。4℃を越えると、水分子間の距離は分子の熱運動によって拡大する効果の方が大きくなる。こうして水の密度は4℃で最大となる(1g/cm<sup>3</sup>)。しかし、4℃を越えると水の体積は増加するものの、図4が示す通り、1gの水の体積は10℃においても1.0003cm<sup>3</sup>で0℃の氷の体積1.0905cm<sup>3</sup>よりもまだ小さいままである。それどころか85℃においてさえ水の体積は1.0323cm<sup>3</sup>であり、氷の体積にまだ及ばないことが知られている。

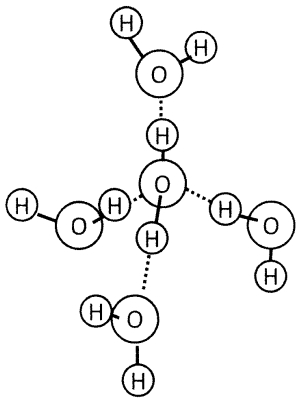


図7 氷における最近接水分子の配置

こうした水の構造的特徴について、『日本の科学者』に掲載された名越の興味深い解説がある(注8)。その核心部分を本節

の結びとして以下に引用する。

水分子は2つの水素原子と2つの孤立電子対を持つ酸素原子とから成り、最大4本の水素結合(⋯)を組むことができる(図7)。

まわりの4つの水分子と4本の水素結合を組んだ正四面体構造は、氷の基本構造であり、常圧の水の分子配置において最もエネルギーの低い構造である。そして、水素原子と孤立電子対の数が同じということとは、どちらかが余ることなく水素結合のネットワークが広がることを可能とする。結晶である氷は、このような四面体構造が周期的に並んでいる。

液体の水はどうかというと、室温での最近接分子数が約4であることが明らかにされている。このことは、水の中でも氷のような四面体構造が支配的であることを意味している。氷とのズレの0.4の部分は、常温で液体の水が氷よりも高密度であることを示している。そして、液体の水は冷却されたとき、エネルギーの低い構造を優先的に形成しようとし、水素結合の数を増やすことで氷のような4配位に近づく。その結果として4℃以下では温度の低下とともに密度は低下する。

### おわりに

地球における水の存在は、自然が示すありふれた奇跡の最大のものの一つである。「その予感世界に満ち、奇跡はときに起きる―それを知らぬ者を痴れ者という」。

かつて二〇〇三年、阪神タイガースが十八年ぶりに優勝したとき年賀状にそう記したことがあるが、世界(人と社会、自然)にはこれと違ってありふれた奇跡の方が圧倒的に多い。ただし、それは、よく知りよく想像しなければ何の不思議でもない種類の奇跡である。

水が氷になるときに体積が1割近く増加することの威力は大変大きい。たとえば、厳寒期には水道管の凍結による破裂や、樹木の幹の凍裂を引き起こすことがある。また、岩石の割れ目に侵入した水は、凍ることによって岩石を破碎する。これは、その後、水が関与する化学反応によって岩石の風化を促進する。『ロウソクの科学』の著者フアラデーは、塩化ナトリウムと水で調整した寒剤の中に水を満たして栓をした鉄ビンを入れておくと、やがて音を立てて破裂することを実験で見せた。鉄ビンの鉄の厚さは13mmもあつたという(注9)。

水の融点と沸点が異常に高い(注3参照)のは、水分子が水素結合でつながるからである。人工合成物質を含めて物質の種類は億を越える。それを構成する元素は自然界には九十二種しかない。九十二種の元素の原子はどのように結合して億を越える物質になるか。結合の仕方は3つしかない。

①原子同士が無数に結合する方法(金属、ダイヤモンドのような少数の非金属物質)、

②原子または原子団が正負の電荷をもつイオンとなって電気的に結合する方法(塩化ナトリウムなどの正負のイオンから成

る物質)、③幾つかの原子が結合して分子をつくり分子が無数に集合する方法(分子性物質)の3つである(図8)。

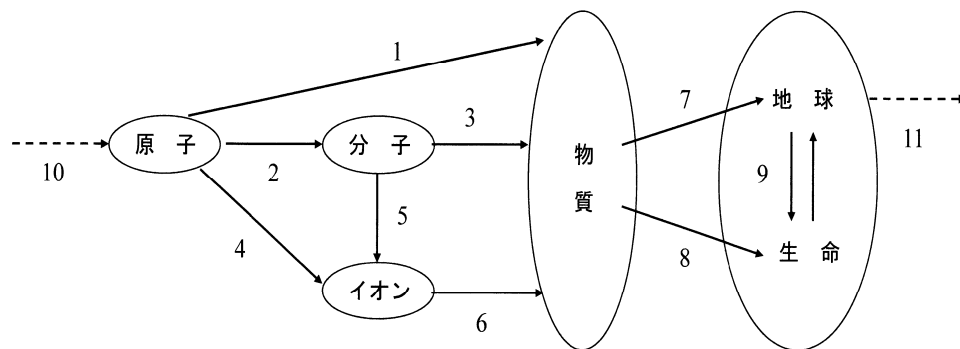


図8 自然界にある92種の元素はどのようにつながり、物質を構成するか

図8 自然界にある92種の元素はどのようにつながり、物質を構成するか(説明)

- 1: 無数の原子が直接結合して物質に至る過程(金属結晶、非金属共有結晶)
- 2: 同種あるいは異種の複数の原子が共有結合して分子となる過程
- 3: 分子が分子間力によって無数に集合して物質に至る過程(分子性物質)
- 4: 原子が電子を失って陽イオンとなる過程、また電子を得て陰イオンとなる過程
- 5: 分子または原子団がイオンとなる過程
- 6: 陰陽両イオンがイオン結合によって無数に結合し物質に至る過程(イオン性物質)
- 7: 物質の集合体、物質系としての地球に至る過程
- 8: 地球上で起きた、地球に至る過程とは質的に異なる生命への物質構成過程
- 9: 地球内部における生命を含めた万物の物質循環過程
- 10: 無限小とも言える素粒子の世界から、物質の基本粒子としての原子に至る物質の構成過程
- 11: 地球から太陽系、銀河系、無限大の宇宙へと至る物質の構成過程

上記①から③の結合の強さは、①と②と③である。具体的には、①金属結合と②イオン結合(数百kJ mol<sup>-1</sup>)、③水素結合(氷における水素結合の強さは20 kJ mol<sup>-1</sup>である(注10)。他の物質間の水素結合の場合、一般に13-30 kJ mol<sup>-1</sup>)、③の中で小さな無極性分子性物質の分子間に働くファンデルワールス力(4 kJ mol<sup>-1</sup>程度

(注11)の順に、一桁ずつ減少する。極端に強くも極端に弱くもない水素結合は、遺伝情報をつかさどるDNAの二重らせん構造をはじめ、生体高分子が3次元構造を維持するのに欠かせないものである。氷が水に浮く話は、生命現象にもつながるのである。

水は太陽系の中でも最もありふれた物質である。凍った池の底で魚が生きているのも、木星の衛星エウロパの氷の下に海が広がっていて、生命が活動している可能性があると言われるのも、氷が液体の水より軽いおかげである。

水分子が電気的な極性を持たず、したがって水分子間に水素結合がでなければ、水は特異性を持たず、普通の微小な分子性物質として振る舞うだろう。そのとき、氷は水に沈む。池や海の底に沈んだ氷は容易に融けることはなく、生物は生きてゆけず、などと考えていて、ハタと膝を打った。水が小さな分子からなる普通の物質で、これまで述べて来たような特異性を持たなければ、そのとき水はマイナス120℃で凍り、マイナス80℃で沸騰するのである。もはやこの地球に液体の水は存在しないであろう。そこに生命が生まれるはずもない。生命があふれる青い地球は存在しないのだ。そう思い至ったとき、何気なく見ている目の前のこの風景は、水がつくった風景であることに、あらためて気づいた。

水だけでできたのではないが、水がなければできなかつた風景である。

固い話の最後に、冗談のような話を二つ。一つは、オン・ザ・ロックか、アンダー・ザ・ロックか。：「何にしますか」「バーボン、ワイルド・ターキーを」「ストレートですか、それとも」「オン・ザ・ロックで」。：「そう言ったのに、出てくるものは必ず、アンダー・ザ・ロックである。あれ、なんでや、と思ったことはありませんか。もう一つは、水に流す話。水に流されるものは、水に溶けて流れるのだろうか。それとも、浮いたままで流れるのか、あるいは混ざっただけで流れてゆくのか。そう思うと、おいそれと水に流せなくなることもあるのではないか、などと考えてしまうこの頃である。

ありふれた水が凶器に変わる夏—そんな夏が、近年繰り返してやってくる。気候危機の回避は待たなしの課題である。水の問題もその中心課題の一つである。本稿がありふれた水に改めて科学の目を向けるための一つのきっかけになれば、うれしく思う。

#### 注および引用文献

(注1)昔、研究に使うジメチルスルホキシド(CH<sub>3</sub>2SO)という有機溶媒(沸点189℃、融点18.5℃)を減圧蒸留法で精製していたときのことである。沸騰し冷却され液体に戻って受け器のフラスコに一滴一滴と溜まってゆく溶媒の中に、針状の透明な結晶がキラキラ輝き沈んでいるのを見た。暖房も切れた真夜中の冬の実験室は寒々としていたが、ある物質の固体がその液体に沈むのを初めて見た瞬間だった。

「そうだよなあ、沈むのがあたりまえだよなあ」と思ったものである。

(注2) 大気(空気)を構成する主成分は窒素と酸素で、その物質量の割合は約4対1である。これに基づき乾燥空気(乾燥空気)の密度を計算すると、25°C 1気圧では約1.2 mg/cm<sup>3</sup>となる。高度が高くなれば大気は薄くなり圧力も減衰する。したがって、ここに述べたことは、私たちが「大気(海)の底」にいることをイメージするために単純化した話であることに注意されたい。

(注3) 元素の周期表第14族から17族の同族元素の水素化合物の融点と沸点を比較したグラフを見ると、明らかに水の融点と沸点が突出して高いことがわかる。水分子間に強いつながりがないと仮定してグラフを外挿し推定すると、水の融点と沸点はそれぞれ、マイナス120°Cとマイナス80°Cとなる(乾 利成、中原昭次、山内 脩ほか『改訂化学―物質の構造、性質および反応』(化学同人、一九八一年)五十六頁)。

(注4) 鈴木啓三『水の話・十講』(化学同人、一九九七年)二十一頁。

(注5) 前掲4)十三頁。(原図は、E.B.ペトリヤノフ著、坂口 諭訳『水の科学Q&A』(東京図書、一九八二年)六十四頁)。

(注6) 前掲4)二十二頁。

(注7) 前掲4)二十三頁。

(注8) 名越篤史『身近な液体、水における液体・液体転移の探索』『日本の科学者』52(6) 36-42(2017)。

(注9) 白川英樹監修、尾崎好美翻訳『「ロウソクの科学」が教えてくれること』(SBクリエイティブ株式会社、二〇一八年)七十一-七十八頁)。

(注10) 前掲3)五十六頁。

(注11) 前掲3)七十九頁。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

## 哲学爺いの時事放談(29)

祖蔵 哲

コロナ禍を生きる「人生の意味」の哲学

2020年も10月になりやつと異常な酷暑が終わった。この気候変動に異常はもうすでに異常ではなく「日常」になっている。それと同時に今年になって突然襲ってきた自然災害、新型コロナもそう「新しい日常」になってきている。そして世界保健機関(WHO)は5日、世界人口の1割に当たる約7億8千万人がこれまでに新型コロナウイルスに感染した可能性があると試算を公表した。実態については検査数が少ないため根拠が不明である。感染が確認された人は、世界全体で360万人となり死亡者は100万人を超えた。同じく第一次世界大戦中の1918年に始まったスペイン風邪のパンデミックは、被害の大きさに際立っており、当時の世界人口の1/3以上が感染、数千万人が死亡しらしい。さすがに医学が発達している現在、そこまではいかないと思うが「世界の大部分が依然、危険にさらされていることを意味する」とWHOは警告している。

新型コロナウイルスの最初の感染確認から10カ月がたったが、流行は終わりが見えない。日本をはじめ、国によっては新型コロナウイルス対策の規制を緩和した結果、第2波に見舞われ、感染者数がさらに増え

たところもある。WHOは、感染者数は国によって大きく異なっており、「すべての国が新型コロナウイルスの影響を受けているが、パンデミックは不均衡だということ」を覚えておく必要がある。10カ国ですべての感染者と死者の70%を占めており、<sup>①</sup>カ国で半数を占めている」と述べ、世界の国々の団結と、強いリーダーシップが必要だと強調している。感染者数はアメリカ、インド、ブラジルの順である。そのトップの国、アメリカではリーダー自身が異常事態に陥っている。

今月2日、検査の結果、新型コロナウイルスに感染し陽性とされたトランプ大統領は、首都ワシントン近郊にある軍の病院に入院して、抗ウイルス薬の投与など治療を受けていたが、入院からまる3日がたった5日で退院した。これまでも、マスクを着用しないなど、リスクに素手で戦うといった根拠のない姿勢が売りであった大統領は現代アメリカの国情そのものである。そして、その支持率が国民の半数近くあるのにも驚く。さらに本来は科学的理性的判断を必要とする主治医が怪しげな薬の投与をし、そして本来は隔離すべき処置を恣意的にコントロールできている。

さて、若干ワイドショー的な話題になってしまいが、この大統領の40歳前後の若い主治医、なんか変と思ったので調べてみた。この主治医、コンリー氏は、フィジシャンとはいうものの、正式には

オステオパシー医である。アメリカの医療資格制度では、医師と同じ法的地位はあるが、実際の治療範囲は、日本で言えば、整体師の範囲。しかし、アメリカではそのような資格でも医療行為や薬の処方指示ができるらしい。その意味で米国は「実利」の国。原理よりも現実(効果)があるという方の重きをおく「功利主義」である。

さて、今回も「まえおき」が長くなったが「哲学」に入ろう。

(1) コロナ禍とはく災いと禍

「禍(か)は訓読みで「わざわい」であるが、『禍』と『災い』は同じ読みだ。しかし両者には明確な違いがある。阻止できる災いか、できない災いかで使い分けられている。

『災い』は、地震や台風などの『阻止できない』災害に使われ、一方の『禍』は人の手や努力などによって『阻止できる災い』に使うのが一般的である。新型コロナウイルスは予期のできなかったウイルスによる自然災害ではあるが、感染拡大の経過や成り行きについては『一人ひとりの意識や行動次第』という面もあるため、『阻止できる災い』と考えられているのであろう。

さて、驚くことに「禍」は伝説上の生物、怪物である。災禍を生み出す存在であると云われ、禍獣、禍母(かも、かぼ)とも。仏教経典の説話に出て来るもので、

何一つ災禍の存在しない豊かな国の王が「わざわざい(禍)」というものがこの世にはあるらしい、見てみたいのでこれを求めて来い」と家臣たちに命じて探索させたところ、市場で「禍母」と呼ばれる禍を生む巨大な猪のような生物が売られており、家臣たちがそれを買って来る。禍は1日に1升・針をエサとして食べるので、王は国民に日々針を差し出させてこれを育成するが、国民はこれに疲弊してしまい国から逃散。困惑した家臣たちが禍を殺そうとするが体が鉄のように硬くなっており刀で斬ることも突くことも出ず、薪をつみあげ火をかけて焼き殺すが、火まみれの禍が城や市街を駆けまわって全てを燃やし尽してしまい、国は滅びてしまった。市場で禍を売っていた商人は天の神の化身であったという。このことから「自ら悪事を招く」ことを「市に禍を買う」と称し、ことわざとして使用されていると言うらしい。

ということ、今日の「コロナ禍」、やはり現代文明が自然を破壊しつくした結果の「自らが招いた禍」であろうか。

## (2) 禍の中の「人生の意味」

さて、先月号ではこの「コロナ禍」であらゆる日常が変わってしまい混乱が起きて、人間は「不条理」な状態におかれるが、しかし次の段階は現在のように「諦め」「慣れ」になってしまうことをカミュの不条理の哲学を引用して語った。

カミュの主張は、この「不条理」の中に可能な限り踏みとどまり、この奇怪な化け物を明晰な観察によって描き出すことであり、真の「不条理」に気づくことであるという。人は「死ぬために生きる」これ以上「不条理」なことはない。人間は「死すべき存在である」という観念を持ちながらも、それを知らぬふりして生きていく。さらに、カミュは既存の哲学者も「理性に逃避」しており無力であると手厳しく批判する。この世界・「不条理」・人間「私」の三項関係(三位一体)は分割不能のものであり、人は「不条理」に對し見て見ぬふりをしてはならないだけでなく、許容(諦念、断念)もしてはならない。人は「不条理」を許容せず(対立を許容すれば対立でなくなる)、「不条理」のままに「不条理」の中を生きることによつてのみ、それは意味を持つと考える。

希望や目的を持つということは、自分の人生を秩序付け、「人生には意味がある」と自分で自分に言いかけせることであり、それは自分の人生を自分の先入観や社会的常識という囚われた枠に押し込めることだ。そしてそれを人は自由と思ひ込んでいる。明日というものはない、この自覚に人間の真の自由の根拠があるのだ。目的を持つことによつて生および人生に意味が生じるということは、つねに自分が或る価値のヒエラルキー(階層、尺度)を選択することを前提としている。では、

意味の階梯を昇ることを拒否する「不条理」の人間の生とは、一体どんな意味を持つのであろうか。意味や価値を問うのではなく、『反抗』という均衡の継続のみに集中する「不条理」の生においては、経験の質的な観念は透明にされ、量的な観念のみが残る。そこにおいては、「よく生きること」ではなく、「より多く生きること」が主題となり「量から質」ではなく「質から量」への逆説的転換がおこる。

## (3) 「人生の意味」とはどういう意味か。

カミュは『意味』を「価値」として解釈した。それはどちらかというと「そのものが持つ価値」のことを表す『意義』に近い。そのものも価値が他のものとのくらの関連をもっているかというのである。「意義」における価値には関係する人や環境と深い関連性があるが、「意味」における価値は比較的普遍性があるという点に違いがある。「人生の意義」といった場合、その人が持つ価値観によつてさまざまな論点が表れてくるが、「人生の意味」といった使い方では、属人性が薄まった一般的な論点になる。

「意義」における価値は、そのもの自体にある。一方「人生の目的」という場合の『目的』においてはそのものによつて得られるゴールに価値を置いている。「人生の意義」という場合、価値は成功や成果といったものの有無によつて決められるのではない。ところが「人生の

目的」は人生において達成したいねらいのことであり、到達できてはじめて価値を持つことになる。

## (4) 哲学的「意味」とは何か

〈意味〉とは何かを定義することは、厳密にいえば不可能である。〈定義〉は言語の使用法のひとつにすぎず、どのような言語使用もすでに意味を先取りしているからである。例えば「意味はAである」という定義が試みられたとする。定義項のAは、言語表現であるかぎり意味をなすのでなくてはならない。それゆえこの定義は循環して役立たない。とはいえ、意味の人間にとっての有意な特徴を描写することはできる。別言すれば、〈意味〉が私たちにとつてどんな意味で重要なのか、あるいは問題となるかを描くことはできる。この描写を手がかりにして、「意味問題」へ接近は可能である。

さてこの角度から再考すると、意味が「理解」という人間の存在様態(認識態度)といつても同じである」と密接に関係することがわかる。理解されるものは、何であれ「意味」と呼んでいい。すなわち、『意味とは理解される場所のもの』であることになる。現象学に由来する意味の概念は、対象は意識に対して、「なものか」として現れるのである。この「なものか」が、つまり対象が意識に対して現象するさいに帯びる同一性が、その対象の、意識主体にとつての「意味」で



あるということになる。

一方、現代哲学、特に分析哲学では「意味」を言語の機能ととらえる。そこでは、

言葉の中のある単位がもつ機能あるいは表現する内容を、その言語単位の意味という。言語単位とその意味との関係をどう考えるかによって、意味の問題への哲学的態度が分かれる。實在論的には、意味はその言語単位の指し示す実体であり、観念論的には、意味は本来各個人の内在観念であって、言語はその個人的な観念を公共の場に引き出しコミュニケーションを可能にするための道具、指標である。また行動論的には、意味はその言語単位を発言者に発言させる状況であり、また聞き手にひき起す反応であることになる。

さてさて、「コロナ禍」が眠りに覚めていた根源的問題を呼び起こした。それは「死すべき人間はなぜ生きるのか」という不条理である。その問いは「人生の意味は何か」となる。当たり前のことを考えるのが「哲学」である。それをこの禍が呼び起こした。引き続き哲学しよう。



### 大峯奥駈道 (35) 下村嘉明

ようやく体の調子も以前のように回復してきたので、少し気合を入れて六甲山を歩こうと考えた。秋晴れの連休に3日間六甲山に通った。体力がどの程度のものか知りたかったので恐る恐る登った。まず、最初の日は、宝塚から大平山までを往復し、次の日は宝塚から摩耶山まで行ったら暗くなってきたので、迷った末に摩耶山からロープウェイを使って六甲道へ下りた。本当は摩耶山の天狗尾根を下り新神戸駅まで歩く予定だったが、弱気になってしまった。少し疲れを感じたので次の日は休みにし、4日目は六甲全山縦走を考えたが婆さんの介護を家内に頼むのも気が引けたから無理のない鴨越駅から宝塚の縦走にした。

このルートは幾度も歩いているから迷うこともないが、果たして歩けるか半信半疑であった。急に体調の変化が起きて歩けなくなるような事が起きないとも限らない。老化と入院によって体力がどこまで落ちているか分からないのである。

鴨越駅に着いたのは、9時半過ぎであった。ちょうどいい時間だと思った。山陽電車の須磨浦公園駅から始まる六甲全山縦走で6時ごろスタートすると鴨越駅に到着するのが10時前ぐらいになる。全体の4分の1の距離である。残りの4分の3は鴨越駅から始まる。そんな

事を考えながら菊水山を目指して歩く。菊水山に1時間で登れば標準タイムである。私は以前48分ぐらいで登った事があるが、今回は時間よりも登れるだろうかという想いが強かった。なにしろ菊水の登りは急な階段が多く非常に疲れるからだ。標高差は230mぐらいなのだが、えらくながく感じられる。この登りを25分ほどで登り菊水に50分余りで登り切った。この時、私は意外と体力があると思いが出てきた。

菊水の次は鍋蓋山である。大きく下ってまた登り返す標高は少し高いだけなのだが、下って登り返すのは精神的にきつい。鴨越駅から2時間足らずで鍋蓋山に登り、市ヶ原に向かって下る。この下りはわりと楽である。市ヶ原からはいよいよ摩耶山の天狗尾根に取りつく。この登りが六甲全山縦走の中で最もしんどい登りである。休むことなく2時間足らずで摩耶山を登る。山上の水場で頭から水をかぶり水を補給する。私は、出来るだけ六甲の水を飲む。自販機も随所にあるのだが、六甲の水の方が身体に良いように感じる。

摩耶山まで来れば、あとは大した登りがないから精神的に楽だ。しかし、宝塚までは遥かに遠い。出来るだけ明るいうちに宝塚に近づきたいから、とても休む気がしない。六甲山系には熊はいないから安心なのだが、気は焦る。不思議なもので明け方の暗闇と夜更けの暗闇は違っ

て感じる。明け方は数時間もすれば夜が明けるといふ明るい希望があるのに、日が沈み暗闇に包まれていくときは当て所のない闇の世界を覚悟してしまうのである。

ある大みそかの夜に、宝塚に最終電車で行って12時過ぎから摩耶山を目指して登ったことがあるが、12時を過ぎれば夜が明ける希望が出てくるが、12時までには漆黒の闇をさまよう感じを私は持つ。これは、私だけの感情かもしれない。そんな想いもあって宝塚には9時までには着きたい。11時頃に着くのは最も嫌な時間だ。

回峰行の行者さんでもお堂を出るのは12時を過ぎた2時頃ぐらいが多いと思う。11時半と2時では、同じ真夜中でもえらい違いだと私は思う。日付が違うというようなことではなく、精神的な想いが全く違うというのが私の考えである。六甲最高峰下に着いたのは5時半ごろで、だんだんと日が沈みます。ヘッドランプを取り出して電池を確かめ頭に着ける。6時を過ぎると一気に暗闇に包まれるから出来るだけ早く下りたいので急ぐ。7時になれば真つ暗になった。頭に着けたライトを頼りに独り黙々と歩く。途中で非常に明るいライトが登ってきた。よく見ると女性だった。こんな時間にどこへ行くのか不思議に思い声をかけた。「どこへ行くんですか?」「ちよっと上まで迎えに」という返事が返ってきた。歩

きながら考えた、そういえば以前にも同じようにボーイスカウトの関係者と思える人が「少年たちを見かけませんでしたか？」と声をかけられたことがあった。あの時は、ほぼ一緒に須磨浦公園から歩いてきたが、摩耶山から私が先行していたので彼らの様子が分からなかった。あの時も8時頃だった。

やっこのおもいで塩尾寺(えんぺいじ)まで来た。あとは宝塚駅に向かって参道を標高差300m余りを下る。この坂が急で膝がガクガクになる。駅に着いたのは9時前、なんと11時間もかかってしまった。早い時には9時間で歩けたのに残念。しかし、歩けただけでも有難い。

次の日曜日朝起きて天気が良かったので家内に相談すると「行って来たら」と承諾がもらえたので家を7時半に出て先週と同じコースを歩こうと思ひ鴨越駅に向かった。日曜日であったのでかなりの人が駅前にいた。渋滞を避けるために先行して菊水山に登った。先週より2分ばかり早かった。調子に乗って飛ばしながら歩いて市ヶ原に鴨越駅から2時間半で着いた。これは行けるかとも思ったが足が重い。飛ばしすぎたのかも思ひながら摩耶山を登ったが2時間もかかった。山上で水をかぶり座って考えた。今日は調子が悪い、先週の疲れも残っている。目の前のロープウェイで下りようか？しかし、この程度で弱気を出してはいかん、どうしてもためなら六甲最高峰

から有馬へ下る手もある、1時間もあれば楽に行ける。まあ、行けるとこまで行こうと決めて歩き出す。

膝や腰が少しは痛い歩けないほどではない。少しでも早く精一杯ある。ほんとなら少しは小走りに行きたのだが膝の調子から諦めて歩く。3時間ほどで最高峰まで来た。有馬へ下りる手もあったが、先週に比べて30分ほど早い5時半だ。これならわりと明るい時間に宝塚への尾根を半分くらいは下りれそうだと考え一目散に下る。6時を回るとやはり周りは暗くなりライトをつける、ひとりの年配者が私を追い抜いて行った。年頃は50代だろうか。しばらくして、今度は若い女性がトレランスタイルで追い抜いて行った。この下りをもとめせずには駆け下りていく様はなんとも気持ちがいい。この暗闇迫る長い尾根を独り走るのは相当慣れている証拠だ。ライトだけで石ころだらけの山道を独り駆け下りるのを見ると女性に対する見方が変わる。強いし度胸がある。

やはり塩尾寺の下りにはてこずり8時40分に宝塚駅に着いた。先週よりも30分ほど早く着いたことになる。足もパンパンになって筋肉痛がひどい、もうこんな事は二度とせんこと思った。家に帰り風呂に入りすぐに寝た。翌朝起きてみると確かに足は痛い先週の時に比べれば少しはましだ。明日にでももう一度挑戦できそうな感じだ。人間の身体は自

分が思うほど軟には出来てない。もう少し続けてやろうか！そんな気がしている。それにしても縦走して宝塚を目指す人が少ない。トレランの二、三人以外歩いてる人は私だけだった。六甲山全山縦走が中止になった影響かな。

## 大人の今昔物語(72)

石川 吾郎

今回は、天狗の登場する話です。教科書に出ない度は三/五。

仏眼寺(ぶつげんじ)の仁照(にんしょう)阿闍梨の房に天狗の憑いた女が来る話

(巻第二十 第六)

今は昔、京の東山に仏眼寺というところがあった。そこに仁照阿闍梨という人がいた。極めて尊い僧であった。年来この寺で行いすまし、寺を出ることもなかったが、あるとき七条あたりに住む金箔打ちの妻だという、年齢のころ三十から四十前ばかりの女が突然、この阿闍梨の房にやってきた。餌袋(えぶくろ・食物入れ)に干し飯をいれ、塩の塊や海藻なんかを携え、それを阿闍梨に差し出し、言う。「尊いお方と噂でお聞きしまして、ぜひお仕え申し上げたいものとの志で参りました。帷(かたびら・一重の着物)な

どを整えて差し上げますことなどはお安い御用でございませう」など、巧みな言葉を残して帰っていく。

その後、この阿闍梨「この女は一体何者なのだろうか」と怪しんでいたが、二十日ばかりしてまたこの女がやってくる。前回同様に餌袋に精米した米を入れ、折箱に餅やそれなりの果物・木の実などを入れて、下女に持たせてやってきた。このようにして女のやって来るのが度々になってきたので、さすがに阿闍梨も「本当に自分を尊ぶ志をもっているから、このように続けてくるのだろう」と、うい奴と思っているうちに、また七月のころ、この女が瓜や桃などをもってやってきた。このときには、この房の法師たちは、みな京に向かいていて留守にしていた。阿闍梨一人だけがいるのを見て、女は言う。「この御坊には、他の人はおられませぬか。人けがありませんか」と。これに阿闍梨は「一二人いる法師たちは、所要にて京に参っておる。すぐにでも戻ってくるじやろう」。女「ちようどよい機会に巡り合いました。実は申し上げたいことがございましたので、このように度々参っておりますが、お伝えすることができませんのであります。是非あなた様に申し上げたいことがございます」と言つて、人目につかぬ場所へと連れていこうとするので、阿闍梨「何かあるな」と思ひ、そばに寄って聞こうすると、女は阿闍梨を捕まえて放そうとせず「年来心に

秘めておりました本心がございませぬ。どうぞお助けくださりませ」と言いながら、グイグイ寄ってくるので、阿闍梨は驚いて「これはどうしたことか」と、逃げようとするが、女はただ「お助けください」と、ひたすら抱きついてくる。阿闍梨は困り果てて「やめてくれ。わかった。言おうとすることは聞こう。それは簡単なことだ。ただし、御仏に申し上げないでは何もできない。すべては御仏にご報告をしてからじゃ」と言って、立ち去ろうとするので、女「逃げられるな」と感じて、阿闍梨を捕まえて、持仏堂の方へ連れていった。

阿闍梨は仏の前に来て、言う「思いがけなく、わたくしは魔物に取り込まれました。不動尊よ、我を助けたまえ」と言い、数珠を砕けんばかりに強く揉み、額を板敷きの床に押し当て、床を破らんばかり。とその時、女は二間ばかり投げとばされてしまった。両腕を差し上げてくるくとコマのように回転し、しばらく甲高い声を上げて叫ぶ。その間阿闍梨は、念珠を揉みしだいて、仏の前に伏していた。女は四五回ばかり叫び声を上げて、頭を柱にあてて、割れんばかりに打ち付けること四五十度。その後「助けたまえ、助けたまえ」と叫ぶ。

この時、阿闍梨は頭をもたげて起き上がり、女に向かって言う。「これはわけがわからん。どうしたことじゃ」女「今となつては、隠すこともできません。我は

東山の大白河に棲む天狗である。この御坊の上を常日頃飛んでおったが、その行いが緩みなく、鈴の音もたいそう尊くスキなく聞こえていた。これはなんと少しでも墮落をさせてやろうと思ひ、この一年ばかりこの女に憑いて、仕組んだこと。しかし、聖人の靈験は尊く、このようにもからめとられてしまった。年来、妬みに思っておりましたが、今はもう懲りました。速やかにお許しあれ。翼は全部打ち折られ、これ以上耐えられませぬ。どうぞ助けたまえ。」と、泣く泣く言うので、阿闍梨はみ仏に向かい、礼拝をして女を許してやった。すると女は憑き物が落ちてすつと正氣に戻った。髪の毛を整えながら、言葉もなく腰を折り折り去っていった。

それより後、この女がやってくることはなかった。阿闍梨も以後は、さらに身を慎み、いよいよ修行は怠りなく行い澄ましたことだと語り伝えている。

#### 《コメント》

天狗が女に憑りついて高僧の修行を妨害するが、失敗する話。この舞台となっている仏眼寺というのは、現在の銀閣寺の付近にあった寺だということです（時代的にはまだ銀閣寺はできていなかった）。主人公の仁照阿闍梨は、比叡山の実白河」という地名も登場しますが、まさ

に現在の北白川の当たりと考えられます。平安時代はこのあたりは、都の範囲からははずれていました。一方、女の住む七条あたりには当時、商人や職人などが集まり住んでいたということです。

銀閣寺のあたりの東山、つまり今の大文字山のあたりに、昔学生時代に私は下宿生活をしており、下宿の窓から夜空を眺めていたその空を、夜な夜な天狗が空を飛び回っていたと考えると、何か楽しくなってきました。

#### 新型コロナウイルス禍愚考(その6)

明石 幸次郎

このコロナ禍によって、自分達の日常生活がこれからどう変容するか？

今年古希を迎え、平均寿命の84歳を生きるとして、あと十数年、**NEW NORMAL** (新しい生活規範) と言われる生活がどう変わるか、又は、自分でどう変えるかで、我々年寄りにとって、残された人生も退屈せずに、送れるのではないかと思ひます。

日本は人生百年時代と言われていますが、現在65歳以上は全人口の84%を占め、このコロナ禍の中で、政府が観光、飲食業再生の目玉にしている、**GO TO TRAVEL**、イートのようなキャンペーン

に積極的に参加しているのは、暇と小金持ちの元気な65歳以上の中高年が多く、補助金と言う恩恵に与っています。

コロナ禍では、健康な70歳と糖尿病や心臓病に罹っている70歳では、同年齢でもコロナによる致死率が全然違うと言われます。高齢者になるほど健康格差が付きます、**GO TO** 何々などの機会があると、健康な老人は今まで我慢していたのでと理由をつけて、積極的に出かける高齢者と、健康でない人、健康であってもコロナの中で、用心を重ね、出かけるのも躊躇して、家に閉じこもりがちの高齢者と分かれます。

先日、ボランティアの電話相談で、50歳後半の女性が60歳の夫が東京に5年間単身赴任していたが、3月に転勤して自宅から通勤するようになった。コロナで通勤はなくなり、在宅勤務となり、ずっと家にいる。自分もコロナが恐いので外出を控えてパートの仕事も止めた。それで、精神的にしんどくなり、うつ状態になりかけている。二人が家に居る時間が長くなり、夫とどう接したら良いのかが分らない、という、訴えであった。話される声に張りがあったので、鬱気味かもしれないが、死ぬほど悩んでいるような状況ではないと、直感して、女性の話に耳を傾けた。

主人は、家にも、仕事はしているようだが、それ以外はタバコを吸うだけで、家の事は何もしない。あと、5年、

65歳まで雇用が守られ働けるようだが、こんな状況が長く続くようであれば、自分の身体が持たないということであった。夫に対する溜まつている不満を口に出して、言うだけ言われたようで、少し間が空いたので、私が「まあ、あなたも大変ですが、ご主人も単身で大変だったと思いますよ。実は、私も東京で単身赴任を8年経験しましたので、貴女のご不満も、今でもそのことで愚妻から文句を言われていますので、よく分ります」と言う。「私とこも、通算で8年単身でした。そうですね、どういう文句を言われているのですか？」と聞かれたので「貴女が先程言われたことと、一緒ですよ。家の用事、親の介護、子供の進学、教育など、大事なことを相談しようと思っても、東京で離れているから出来なかった。何でも自分で決めないといけない。男の人仕事、仕事と言いつつから良いわ！などですよ」と答えると、あっはっはと明るい声で笑い「私も一緒ですね。奥さんの気持ちがよく分ります！」と言われた。

「私も望んで、東京に行った訳ではなくて、会社の命令で行ったのであって、ご主人もそれは、同じ事であって、やっぱりこちらに帰ってきたかと思つた途端にコロナ騒ぎで、想いもよらない在宅勤務になり、家に居ても仕事以外何をしてよいか分らず、戸惑っておられるのではないのでしょうか？又、この様な外出自粛の

状況がこれからもずっと続くと言う事はないと思いますよ」というと、一段と声が明るくなり「在宅勤務がコロナが終息しても続くことはないですか？」「まあ、日本の会社で、メーカーで営業と言う事であれば、完全に在宅勤務とはならないでしょう。週に何回かは、よく言われるリモートワークで家で仕事をされるかも知れませんが」「そうですね、それは、よかったです、家で何もしなくてすから、やはり、これからのことを考える気が重くなります。その点は、奥さんはどうされていたんですか？」「参考になるかどうかですが、自分で時間を作り、好きなことをしようと思つて、ずっと色々やっていたようで、今もそうですね」と言う。

「そうですね、それは、私には出来ません。今まで、パートの仕事が忙しかったし、子供の事、親のこともあったので、これと言つた趣味を見つけることは出来ませんでした。親は亡くなり、子供は独立したので、家では、二人ですし、コロナが怖いので、趣味を見つけたのですが、出来るだけ外出は控えています」と言われたので、「そうですね、ご主人があと5年働かれて、経済的にも安定しますね。それは、それで、有難いことですね。しかし、そのご主人がずっと家におられるとしんどいと言われる、ご主人にどうして欲しい

のか、話はされましたか？」と問いかけると「はい、何回かしましたが、聴く耳を持ちませんので、こうして電話で話を聴いてもらっています」

「そうですね、まあ、60歳のご主人を変えようとするのは、貴女にとっては、ストレスが溜まり、難しいことですね。それであれば、貴女自身をこのコロナ騒動を機会に変えられたらどうですか？ご主人はご主人で、健康で働いてもらい、それより自分が何がしたいのか、自分の好きなことは何なのか？を見つけて、今の内にやっておかれる事が大事ですよ。自分の世界を作って、それで、又、人と交わって家族以外の人間関係を作るようにされたら、年取ればどちらかが残り一人になるんですから。人生百年と言われるてますね。少なくともあと、20年はご主人は別にしても、貴女ご自身の時間を優先して、自分ひとりでも、楽しく、おかしく生きていけるように今から準備され方が、これからの時代は勝ちですよ！」と言い過ぎたかなあと思つたら「あっはっは。本当にそうですね。好きなことをした方が勝ちですね。本当にそうですね。5年ぶりにお腹の底から笑わせて貰いました。有難うございました」で、1時間で電話は終了しました。

少しは私との話が役に立ったのかと、思うと共に、コロナをきっかけに男も働き方を変えると共に、家での家事も担い、特に定年後は、自分で料理その他生

活を維持できる様にすることが、結婚してからの生き方が男女共にフェアになり、これがNEW NORMALになるのではないのでしょうか。

## オクラの山たより (49)

困了生

一

一七五七(宝暦七年)九月、四十二歳の蕪村は丹後宮津を出て京に帰つてきます。帰洛後の蕪村は俳諧に活躍し「一身にして二芸あり」の道に進んでいく訳なのですが、二芸のバランスはどうであったのか。特に蕪村は日々の生計をどうしたのかという点を中心にしてこのことをみていこうと思ひます。

最近も大阪府立中之島図書館で蕪村の展示会があったそうですが、数年に一回は全国のどこかの美術館や博物館で蕪村の展示会がされています。そうした場に行きますと演示されているのはほとんどが絵画作品で彼の作品を載せた句集や書簡などは全体の一割もあるでしょうか。二十年ほど前に私が足を向けた大阪市立美術館で開かれた蕪村展覧会では多くの掛け軸や屏風、俳画が展示されており、会場は明るくはなやいだ雰囲気になり満ち満ちていました。これが、芭蕉の展示会となると大きく様変わりするでしょう。蕪

村と並んで、いやそれ以上に江戸時代を

代表する俳人とされる松尾芭蕉ですが、

蕪村の展覧会が盛んなのに対して芭蕉の

それはめつたに開かれませんか。また、開

かれたとしても展示されるものは「奥の

細道」などの出版物とその草稿、短冊な

どに書かれた真筆とされる作品、そして

書簡といったところでしょう。聞けば芭

蕉自筆の短冊などの作品が四百五十点以

上あるそうで、この数に驚かされますが、

さすが俳聖芭蕉。彼に対する十七世紀以

来の人々の思いの強さを感じさせる数で

す。その中には晩年に芭蕉が手がけた絵

画作品もありますが、どうひいき目に見

ても素人の絵であり、かたや蕪村は押し

も押されもせぬ絵筆のエキスパート。絵

画作品の優劣は歴然です。俳諧一筋の人

であつた芭蕉に絵画について云々するの

は酷というものでしょう。

ところで俳諧一筋の芭蕉。その生活は

どうやって可能となつたのでしょうか。

かなりの収入が期待できた江戸で評判の

点者の地位を捨てて、居を深川の地に移

して後、芭蕉は

「なほ放下(ほうか)して栖(す)みむを去

り、腰にたゞ百錢(ひゃくせん)をたくはへて、拄杖

一鉢(いちぱつ)ちゅうじょういっばつに命(いのち)を結ぶ。

なし得たり、風情(ふうせい)つひに蕪(う)こもをかぶ

らんとは」

### (栖去之弁)

といっているように、俗世間で得たすべ

涯を求めました。

とはいえ、生身の人間のこと、霞を食

つて生きていくわけにも参りません。そ

の点どうかといえ、深川転居後、「座敷

乞食」とまでいわれた江戸の一般的な俳

諧師よりも芸術的には一段と高い俳諧隠

者だと世間では尊敬するようになり、か

えつて名声が以前より上がり、質のいい

(資力のある)門人がふえ、生活が安定

してきた、と近世文学の研究者である井

本農一は指摘しています。

文化支援の公共政策のない江戸時代の

こと。経済的な支援者を見つけないのは近

世の芸術家にとって芸術そのものの才能

と同時に必要な才覚でした。こうしたこ

とからいくと芭蕉は幕府御用の魚商であ

つた杉風を筆頭に金銭を持つパトロンを

大切にしたと思われまふ。また、弟子に

恵まれるためには、単に俳諧の能力だけ

ではなく上に立つ人望、リーダーとして

の力量が必要です。

よく知られていることですが、若いこ

ろ芭蕉は神田上水の改修工事の請負人、

工事の現場監督のような仕事をしていま

す。工事は四年を費やし見事に完了した

と伝えられていますから、仕事の段取り

を決め、作業をする人の心をつかんで時

には叱咤し、工事の完了まで導いた芭蕉

のマネジメント能力は相当なものとする

べきでしょう。たぶん現代でも事業家と

して十分な力量を示し得たことでしょう。

芭蕉を尊崇する方には申し訳ないです

が、芭蕉は金銭に無頓着な人間では決し

てありませんでした。

「短冊百枚、これ餓(う)むたる日の錢(せん)の代(しろ)

なす物か」

と書簡で述べているように短冊に自作の

句を書き付ければ旅館や路銀の代用とで

きるという自信が芭蕉にあり、商品とし

ての自分の価値について十分に自覚して

いたとみられ、彼の金銭に対する関心は

かなり高かったといえそうです。だから

こそ、彼の残した文章には逆にそのこと

を気取られないように後代に書き残すこ

とを嫌つたのではないか、という想像が

できます。芭蕉は作品や書き残したもの

の上で金銭のことは何も書いておらず無

関心を装っています、一度つかんだ金

蔓は手離さない魅力・技術・知恵を十分

に身につけた世渡り上手で世間知にたけ

た人であつたのではないかと思われまふ。

芥川龍之介が芭蕉を「日本の生んだ三百

年前の大山師」と評したのは相応の理由

があつたのです。ただし、これは多方面

にわたつてすぐれた才能を持った芭蕉の

一側面であり、単なる言葉遊びであつた

俳諧を一気に芸術へと押し上げた彼の功

績を減じるものではありません。

### 二

次は蕪村です。芭蕉には江戸に其角・

嵐雪・杉風、京に去来・凡兆、伊賀に土

芳、尾張に荷兮、美濃に支考、大阪に野

坡、近江に丈草・許六と全国に門人たち

がいたのですが、蕪村にはそうした門人

たちの全国ネットを持つことはありません

でした。あちこちの俳人との交流はあ

りました、ほとんど上方周辺の同好の

士たちとのみ俳諧を楽しんでいたような

気配すらあります。その様子を伝えるエ

ピソードがあります。

五十五歳の蕪村が立机(正式に俳諧の

宗匠となること)して夜半亭二世を名の

つたと同じとき(一七七〇年三月)に十

口編の「俳諧家譜拾遺集」という京に於

ける当時の俳諧人名録が刊行されまし

た。確かにそこには蕪村の名前が載せら

れています。しかし、その紹介の仕方

は若干ひつかかるところがあります。

「与謝氏、当春、点列に加えられし由、

いまだ告げ来たらざといへども、風聞

にまかせてこれを記す」

「点列」とは俳諧点者に列せられたこと

をいう言葉。その届け出はまだ来てない

けれど「風聞(ふうぶん)うわさ」によればそう

なつたらしいから記載するとあります。届

け先は編者の十口であつたらしいので

が、どうも蕪村の側から積極的に「この

度、正式に俳諧点者の座につきました。

ついでには今後ともよろしく御願いま

す」と申し出て、京の俳壇の仲間とな

りたいという動きをしたとは思えません。

そればかりではありません。俳諧の宗匠

になるまでの数年間、蕪村の近くにあ

つて一生懸命に句作をしていたのは召波

なのですが、その彼でさえも蕪村の夜半亭



襲名を披露する会に招かれた形跡はありません。襲名の会の数日後に召波宛に三月二十二日付の送られた手紙に

「愚老ひろめの事も、滞りなく相済み候間、御安心下さるべく候」

とあり、この文面によれば召波は襲名の会に出でいなかったこととなります。「宗匠になった」と自分からは京の俳人たちに触れ回ることもなく、極めて消極的な立机であった考えられます。さらに、この召波宛の書簡の直前には

「朔日、御会の事、得意つかまつり候」

とあり文意は「四月一日に召波宅で句会があるが、その場で秀句を披露してみんなをアツといわせるぞ」です。今まで仲間うちで句作に精進してきた蕪村と召波の二人にとって最大の関心事は蕪村が俳諧宗匠・点者列座になったということよりも句会で発表される作品の質であったのです。それは同好会のようにとはいえこれまで励んできた句会（三葉社句会といった。同好会ながら太祇や嘯山という当時の京で飛び抜けた実力を持った俳人も参加していた）への熱意や自分たちの句作への自信のあらわれであったのでしよう。ちなみにこの時期の蕪村の句を見ると次のように教科書に載るような秀作ぞろいです。

春雨や 小磯の小貝 ぬるるほど  
青梅に 眉あつめたる 美人かな  
鳥羽殿へ 五六騎いそぐ 野分かな  
みどり子の 頭巾まぶさき いとをしみ

### 三

俳諧の宗匠になるというのは門人をまとめて俳諧の活動を行っていくリーダーになるということです。そのため以下のような仕事が出てきます。

- ①会場を設定して句会を催す
- ②門人から送られた作品に点数を付けたら、添削・批評したりして返送する。
- ③歳旦帖や春興帳を発行する。
- ④一門の句集や摺物を刊行する。

これらの仕事をやりとげるには本人や門人たちの努力も必要ですが、経済的な支えも必要です。蕪村もいくばくかの収入はあちこちから得ていたようですが、一般の宗匠たちとはずいぶんと違っていました。たとえば蕪村は夜半亭一門の運営費用や出版に際しての実費は集めていたようですが、句会ことの謝礼金を受け取らなかった可能性があります。蕪村の句会は同好会的な性格が強かったからです。

このあたりの事情を示す手紙があります。宛先は京の本店の主人である寺村百池。彼は蕪村にとって後ろ盾として最も頼りになる弟子でした。日付は蕪村六十七歳の一七八二（天明二年七月十一日）です。

「御物遠に御座候。中元の御祝儀南鐐一片、かたじけなく受納いたし候。別に月並料、花鳥編入料たしかに落手いたし候。さてさて花鳥編不寄（ふより）」

にて愚老の損耗お察しくたさるべく候」

「御物遠に御座候」とは「御無沙汰いたしました」ということ。「南鐐一片」は二朱銀のことで一両の八分の一、今の二万五千円ほどの金額です。この手紙の中で蕪村は三種類の金銭を受け取ったことの御礼を述べています。まず南鐐一片をいただいた中元の謝礼。そして「月並料」。これはきつと夜半亭一員としての月謝のことでしょう。最後は「花鳥編」への入句料への謝辞。この「花鳥編」はこの年の夏に出たのですが、予定したとおりに費用が「不寄」、集まらなかったらしく蕪村はだいぶ困っていたようです。

こうした出版物に関して蕪村が苦労するのは珍しいことではないらしく次のような手紙も残っています。宛先は弟子の黒柳維駒。維駒は蕪村の句会の熱心な参加者であった黒柳召波の子。日付は一七七七（安永六）年四月二十九日です。

「表紙に山伏の絵を載せた「山伏の摺り物」を先日出版したのだが、人別に入り用割り付け候ところ、連中の内に尊卑甲乙もこれあり候。これにより貴公様よりは銀五両ほど御出しくたさるべく候。惣高、大奉書六帖あまり刷らせ候故、かかり物二百四十目あまりに付き申し候。

（予想以上の評判となり今回の摺り物を欲しいとあちこちから希望があり、京だけではなく諸国からも希望がある

ので）諸国へ配り候故、書状おびただしく認め（したため）、その上板にはさみ封もしなど、いやはや世話の至り、その上飛脚賃なにかと別して（ ）の用につき、ひまをつぶして、あたかも泥中の蓮（はちす）のごとくに候。（ ）の部分は判読不能です。

奉書一帖は五十枚に当りますので、六帖となると総部数は三百部。この出版にかかるすべての経費は二四〇目。今の四十八万円ぐらいに当ります。この費用をまかなうのに作品を出したメンバーに相應の負担を御願いするのは今の同人誌でも同じ。ですが連中、つまり夜半亭に集う人の間でも家柄・商売柄でずいぶんと差があり、均等というわけには行きません。それで夜半亭の有力な後ろ盾でもあった維駒に銀五両（今の四万三千円）の出費を「是非とも」と御願いしているという次第。こういう下世話なことまで蕪村がしているのはおもしろいですが、他の手紙からするとこういうことは蕪村にとって珍しいことではなかったようです。

手紙の後半では今回の摺り物が想定外の評判となり京だけではなく諸国からも「欲しい」という希望があるため、蕪村がバタバタと大変な苦勞をしている様子が書かれています。摺り物に添える書状づくり、発送のための荷造り、そして郵送料ともいえる飛脚賃。文面からするとこれはどうも蕪村の持ち出しであったよう

です。目の回るような忙しさです。蕪村一人で駆けずり回っていますが、ほとんどもうけのない、いや、それどころか身銭を切ることとなる出費もあるという仕事となつています。俳諧の宗匠の任務を必死にはたしているというよりは、これはもう彼の道楽、娯楽ともいえるのではありませんか。

彼自身が、この維駒への手紙の最後で次のような本音をもらしています

「その暇つぶしを画の方にて精を出し候へば、大いに利益これあり候ことに御座候。俳諧は好物故、手ばまりのみ多く候て、これ以後は止めにしたすべきかとなげき申し候ことに御座候」

「手ばまり」とは誰のせいでもなく自分でまねいた災難・苦境のこと。自分のしていることを「暇つぶし」と自虐的に述べ、俳諧は「好物」だからやっているけれど、「手ばまり」ばかりになるので、こんなこともやるもんか、とグチをいつているのは面白いです。ただし、この文面の中で見過ごせないのは「その暇つぶしを画の方にて精を出し候へば、大いに利益これあり候ことに御座候。」の部分。こんな「暇つぶし」をしている間に絵を描いておれば大いに利益が上がったはずといっています。俳諧は道楽、どんなに散財しても、どんな労苦があろうと苦にはならぬ、絵画こそが生活を支える自分の本業という蕪村の内なる世界がここから見えてきます。

この意識が蕪村を俳諧にひたすら没入する姿勢とは全く違う方向へと歩ませ、彼の俳諧を当時にあつて独自のものとしたと考えられますが、どうでしょうか。

#### 四

俳諧が蕪村にとつて道楽に等しいものであるならば本業である画作の方はどうでしょうか。近世の京都に住まいのある文化人名録である「平安人物志」の一七六八（明和五）年版に「画家」の部門に池大雅、円山応挙、伊藤若冲と並んで与謝蕪村の名前があります。宮津から京へ帰つてきて十年あまり後には京で第一級の画家となつたといえます。そのため蕪村の書簡には次のような言葉が多く出るようになります。たとえば次の召波宛の一七六八（明和五）年ごろの手紙。

「絵三昧、おのずから誹腸（はいちよう）薄くまかりなり候」

「誹腸」とは句作をしようとする気持ちのこと。「画先俳後」の生活ぶりがよく出ています。また、一七七四（安永三）年の門人である大魯の「ぜひとも発句を送つて欲しい」の依頼に対しての返事では「この節、画用のみに取りかかり候ふて、絶俳にて、一句も得申さず候」と書いています。何をかいてもまず画用をこなすのが先決であり、俳諧は後回しとなつていたのである。画家であり同時に俳人であるとは蕪村に関しては簡単には

ないものがあり、蕪村にとつて生活の拠り所となる本業は画業であり、身銭を切るような道楽に等しい俳諧は二の次であつたのです。

では、なぜ画用に専念せねばならないのか。そのことを語ってくれるおもしろい手紙があります。宛先は兵庫きつての豪商で蕪村の支援者である北風来屯（きたかぜきたむろ）です。日付は一七八八（安永七）年の大晦日も近い十二月二十一日。蕪村は六十三歳です。

「この度、左の通り、画あい下し申し候。よろしく頼み奉り候。

十二枚屏風押し絵

これは二幅対に用い候へば、六対にあい成り申し候。

右の画は、奥州会津よりの求めにてしたため置き候ふところ、遠境のこと故、急に一物に成りかね候ふ故、会津下しは春永（はるなが）にいたし下し申すべくと存じ奉り候。右の画料、銀五枚に約束いたし、したため置き申し候」

江戸時代の慣例では盆前と年越し前の二つの時期に半年または一年分の債務を支払わねばなりません。「貧乏神の御利益のみ顕著な生活」といつている蕪村のこと、年末を迎えて、かなり差しせまつた状況にあつたのでしよう。

冒頭に「この度、左の通り、画あい下し申し候。」とあり、できあがつたばかりの絵をお送りいたしますと言つています。この手紙は要するに絵の送り状なの

です。その絵とは十二枚の絵を押し絵として屏風に貼り付けるためのセットになつた絵で六曲一双の屏風というから大作です。この押し絵屏風はもともと奥州の会津から注文された物だが、あまりに遠いので送つてもすぐには代金をもらえそうになく年末には間に合わない。会津の方は来春に回してもいいので、仕上げた作品をあなたの方に回したといつています。厚かましいといえれば厚かましい御願いですが、さらに代金もしっかりと明記してあります。会津とは銀五両で約束したと。銀五両は三両三分にあたり今の七十五万円ほどになります。押し売りに近いのですが相手は兵庫一の豪商。なんとか無理は通ると踏んだのでしよう。蕪村も必死です。先の文面に続いてこんな泣き言も書いています。

「愚考義、当冬は古借返納の限りこれあり。少々足り申さず候に付き、右の工面に取りはからい申し候。何分、御賢慮の次策、御取り計らいくださるべく候」

暮れも押し詰まつた時期です。「古借返納の限り」つまり古い借金の支払い期限が迫っていました。しかも手元不如意。ピンチの蕪村は押し売りも辞さず泣きついでいるのです。特に年末は大節季といって貸借関係を皆済する必要があります。蕪村も人の世に生きる一人。借りたお金は返さねばなりません。追いつめられた蕪村がひねり出したのがこの手紙でし

た。

この結果はどうなったか、押し売りの翌年一月五日付の手紙も残っています。

「まことに旧年は御事多き中、さつそく画料二百五十目御登せくだされ、相違なくあい達し、御陰徳をもって、行路難をしのぎ候一助にて、はなはだ大慶つかまつり候」

「行路難をしのぐ」とは世渡りの苦しさをやり過ぎること。なんとか蕪村は北風来屯に救われたようです。しかも払ってくれた画料は二五〇目、つまり銀二五〇匁。六〇匁で金一両ですから四両（今の八〇万円）以上のお金を払ってくれたのです。しかも十二月二十一日の手紙に対して年内に送金しています。江戸時代のことだと考えると来屯は大急ぎで手配したに違いありません。

## 五

蕪村にとって現金収入はまずは絵画でした。俳諧から来る収入は彼の生活を決して支えるものではありませんでした。また、蕪村には画業という仕事があったので、俳諧で多くを望む必要はなかったのです。画業という生活の支えがしっかりとしていれば俳諧で気楽にやって行けたといえます。残された手紙から見ると門人たちも月々の月謝、ときどきの祝儀、仲間出版する撰集等の分担金と、相応の負担をしていれば義理をはたしたということになったでしょう。

蕪村の生業は何よりも絵画を描くことでした。人気が出るに従って画業が多忙になるにしたがい句作はしにくくなりましたが、蕪村にとつては第一に絵画であったのです。

この「画先俳後」が蕪村の俳諧活動にどういう意味を持ったのか。最も大きなことは夜半亭一門の勢力拡大・拡張に血道を上げる必要がなかったことです。蕪村には大勢の門人をあちこちに持つ必要はなく、気心の知れた仲間と遠慮のない語らいをしつつ俳諧を楽しむことができました。蕪村の活動した時期は世間では蕉風復興の時期にあたっています。蕉風復興の声や動きが全国で蔓延した時代でした。門人拡大ということであれば当然この流れに乗るべきなのですが、蕪村はそうした動きには背を向けます。芭蕉を大変に尊敬していましたが、当時はやっていた蕉風にはかなり批判的な目を向けていました。世間の浮ついた動きから一定の距離を置くことを可能にしたのは彼には画業があったからです。余人の追隨を許さず時代の流れの中にすくと屹立している蕪村の俳諧は彼の画業と彼の絵を愛する人々によって支えられていたものでした。

また、蕪村の絵を愛好する人々の多くは京の町衆や地方の分限者でした。この人たちとの人脈を築く際に俳諧という共通の趣味道楽は大きな武器となったことでしょう。句会や茶会で床の間に飾られ

た京で評判の絵師の絵。おそらく客人への最高のおもてなしになったはずですが、こうした思いを持った人々にとって趣味の俳諧をツテとして都の人気画家に注文がしやすくなるというわけです。

一流の絵師の活動をしながら俳諧の宗匠としても活動していく。どちらも蕪村にとつては生活を維持する面でも自らの芸術性を高める面でも重要なことだったのでした。

蕪村が描いた絵の評判の高さは彼の友人であった上田秋成が彼の死後、次のように書いています。

「蕪村が絵は、あたひ今では高間の山桜花。俳諧師が信じて、島原の桔梗屋の亭主がたんと描いてもろうて、廓中の財宝も価が今は千金」 「胆大小心録

蕪村の絵がとんでもない高値で売買されていること、そして島原で有名な妓楼桔梗屋の主人は蕪村にたくさん絵を描いてもらって今は大もうけしていることを秋成は述べています。狩野派や土佐派のように將軍家や大名家に召し抱えられたり、宮中の御用を勤めたりできたりする見込のまったくなかった市井の一絵師であった蕪村。生前にあつては「家内の物入り、そのほか、生涯の困窮、お察しくださるべく候」「おびただしき借金、困りはて申し候」「代金の納入を、早天（かんとん）に雲を待つ心地に候」といった窮状にあつて絵の代金の支払いを懇願する手紙を多く残した蕪村に、この秋成の言葉

を聞かせてみたかったですね。

## 隠された歴史（24）

満田正賢

前回は欽明天皇にまつわる真実を探りました。その結果、『欽明天皇』出生の記述は創作されたものであり、『欽明天皇』の実体は蘇我稻目の娘と婚姻した安閑天皇の子であった」という仮説にたどり着きました。この仮説は、「近畿王朝の正統な後継者として筑紫（那津官家）に遷都した宣化天皇の嫡子が後期九州王朝（Ⅱ筑紫天皇家）を立ち上げ、近畿に残る勢力は後期九州王朝の臣下となった」という私の仮説と整合するものでした。その事実をねじ曲げ、偽りの天皇家の系図を創作したのは蘇我馬子であると考えます。そして、「日本書紀は蘇我馬子が作った天皇家の系図から後期九州王朝（筑紫天皇家）の存在を消し、さらに『蘇我馬子は欽明天皇の実子で、蘇我氏に養子に入り蘇我氏の首領になった人物である』という（真実は別に）あつてはならない記述を消した」という仮説にたどり着きました。

今回は、宣化の子による後期九州王朝（筑紫天皇家）創建に至る継体・安閑・宣化紀をもう一度振り返ってみたいと思います。

まず、継体紀の中で創作されたと思われる記述について考えてみます。それには、「隠された歴史(1-2)」でご紹介した三品彰英氏の見解を借ります。三品氏は日本書紀研究会を創設した、日本書紀そして継体紀研究の第一人者ですが、三品氏は「継体紀の諸問題」特に近江毛野臣の所伝を中心として「日本書紀研究第二冊・昭和四十一年所収」の中で、このように述べています。

「筑紫の君磐井の反乱のことは(中略)近江毛野臣の加羅派遣と連関されて(中略)二者の関係を叙述している。もちろん『書紀』撰者の作文するところであるが、(中略)磐井の反乱は『古事記』の所伝のように、継体の御代のこととして古くから伝えられているだけで、年次の如きはもちろん不明の所伝である」

従来の磐井の乱の評価は、磐井の乱が継体二十一年(五二七)から継体二十二年(五二八)にかけて起こったものであることを前提にして議論されてきました。古田史学の中でも同様でした。しかし、磐井の乱がそれ以前に起こった事件であると想定すると、一つの可能性が生じてきます。それは、「九州年号」が継体によって建元されたという可能性です。

九州年号の始めは、それを記す多くの書物が継体十六年(五二二)に作られた「善記」という年号だと記しています。「二中歴」だけは、継体十一年に作られた「継体」が年号の始めだという立場を

とっています。継体が倭の五王に続く前期九州王朝を倒して自ら「倭国王」を名乗り、年号(元号)を建元したと考えればスツキリとした説明がつけます。倭の五王は中国南朝から將軍の称号を与えられ、中国の冊封下に入っていました。中国の冊封下では、自らの国の年号は建てられません。古田史学では、倭王武が梁から「征東大將軍」ではなく「征東將軍」に格付けされたことに不満を持ち、中国の冊封体制から離れたことを契機にして、元号を建元したのではないかと説が語られています。しかし、倭王武が中国の冊封体制から離れたというのはあくまで想像の域を出ません。中国とのしがらみを持たない継体が新しく「倭国王」になり元号を建元したとなればスツキリします。

「継体天皇」という漢風諡号は天平宝字六年(七六二年)〜同八年(七六四年)に淡海三船が他の天皇の漢風諡号とともに一括撰進したとされています。しかし継体は二四年二月条にある詔の中で、自らを「継体之君」と呼んでおり、淡海三船はこの表現を参考にして男大迹王に「継体天皇」という漢風諡号を付けたものと思われまます。そうであれば、「継体」という年号も倭の五王につながる前期九州王朝の王が制定したと考えるよりも、男大迹王が自らの呼び名にちなんで名づけた可能性の方が高いのではないのでしょうか。

とっています。継体が倭の五王に続く前期九州王朝を倒して自ら「倭国王」を名乗り、年号(元号)を建元したと考えればスツキリとした説明がつけます。倭の五王は中国南朝から將軍の称号を与えられ、中国の冊封下に入っていました。中国の冊封下では、自らの国の年号は建てられません。古田史学では、倭王武が梁から「征東大將軍」ではなく「征東將軍」に格付けされたことに不満を持ち、中国の冊封体制から離れたことを契機にして、元号を建元したのではないかと説が語られています。しかし、倭王武が中国の冊封体制から離れたというのはあくまで想像の域を出ません。中国とのしがらみを持たない継体が新しく「倭国王」になり元号を建元したとなればスツキリします。

磐井の乱、すなわち前期九州王朝消滅後に、継体によって善記という九州年号が建元されたという可能性は、磐井の乱が継体十六年(五二二)以前に起こったという想定をすれば現実味を帯びます。善記以後の九州年号の改元をみると以下になります。

善記…五二二年…継体一六年  
正和…五二六年…継体二十年  
教到…五三二年…継体二十五年  
僧聰…五三六年…宣化元年  
明要…五四一年…欽明二年  
改元は、基本的には天瑞によって行われますが、天皇交代による改元も行われ、天皇交代による改元は即位元年か即位二年に行われています。参考までに「大宝」改元(建元)以降の例を記します。

即位元年改元の例…靈龜…元正元年、神龜…聖武元年、天平感宝…孝謙元年、宝龜…弘仁元年、天応…桓武元年、大同…平城元年  
即位二年改元の例…和銅…元明二年、天平神護…称徳二年、天長…淳和二年、承和…仁明二年、仁寿…文徳二年、貞観…清和二年

正和は天瑞で、僧聰・明要は天皇交代での改元と考えると、問題はありません。しかし「教到」については考察が必要で

す。

日本書紀に依れば安閑天皇は欽明二五年に即位したことになっており、それを前提にすれば「教到」の改元時期に問題はないのですが、継体天皇の没年は或本による継体二八年が正しいと考えられており、それを前提にするとつじつまが合いません。しかし、継体紀には「二五年春二月、天皇は病が重かった」と記されており、安閑紀には安閑が即位した日に継体が亡くなったと記されています。安閑は継体から生前讓位を受けたということが日本書紀の記述の裏側に隠されているように思われます。安閑即位の三年後に継体が崩御したと考えれば、安閑即位時の改元として、「教到」の改元の説明も付くと考えます。

次に、もう一つの継体紀の創作について考えてみます。三品氏は前述の論文の中でこのような指摘もしています。「廿年秋九月丁酉朔己酉条の『都を磐余玉穗(奈良県桜井市)に遷す』という記事も史実的には不安な記載である」

継体は樟葉宮において即位します。そして継体五年に筒城宮に移ります。更に継体十二年に弟国宮に移ります。継体は淀川・木津川領域を拠点としていたことが分ります。継体が、弟国(乙訓)に隣接する三島の藍の地に自らの陵墓の建設を始めていたことは、けしておかしなことではありません。しかし、継体が継体二〇年に大和に遷都したということにな

れば、三島の藍の地に自らの陵墓を作ったことの説明がつかなくなります。「廿年秋九月丁酉朔己酉、都を磐余玉穂に遷す」という記事は、遷都ではなく単なる大和訪問の記事であった可能性が有ります。又は全くのねつ造であったのかも知れません。

但し、「都を磐余玉穂に遷す」という記事は日本書紀の創作ではありません。古事記の記述では継体即位の最初から「坐伊波禮之玉穂宮、治天下也」と記されています。古事記では、樟葉宮・筒城宮・弟国宮のすべてが消されています。私の仮説に依れば、蘇我馬子が編纂した「天皇記」「国記」「臣連等の本記」においてこの歴史のねつ造がなされたということになります。日本書紀は「近畿天皇家の一元支配」という歴史を否定しない限りにおいて、元史料に記された実際のエピソードを記したと思われます。それに対して蘇我馬子によって編纂された「天皇記」「国記」「臣連等の本記」は、シンプルに「大和にいた天皇家の一元支配」を創作しているように感じます。それは大和の飛鳥の地がまさに蘇我馬子の本拠地だったからではないでしょうか。

次の安閑は大倭(やまと)の国の勾(まがり)の金橋(奈良県橿原市)に、その次の宣化は檜隈(ひのくま)の廬人野(いおいりの) (奈良県明日香村)に遷都しています。古事記も同様です。いずれも蘇我馬子の本拠地の近辺です。まさしく「大

和にいた天皇家」です。しかし、安閑紀を見てみると、エピソードの中では、むしろ継体陵のある三島の地域が舞台になつてることが分ります。安閑紀の主要な国内記事を列挙します。

①元年四月・内膳卿膳臣(かしわでのつかさ)のきみのかしわでの(おみ)大麻呂が、伊甚(いじみー千葉県勝浦市辺)の真珠を求めたが、伊甚国造らが期限をおくれ、後宮に逃げ隠れた罪で屯倉を献上した。

②元年七月・皇后に屯倉を与えようとして大河内直味張(おおしこうちのあた いあじはり)に良田を差し出すよう求めたが、味張は「この田は収穫が少ない」と嘘をついてそれを逃れた。

③元年一月・天皇が大伴金村に勅して、皇后と妃に屯倉を与えた話。大伴金村は「許勢男人大臣の娘紗手媛(さてひめ)には小墾田(奈良県明日香村)の屯倉と田部を、紗手媛の妹香々有媛(かりひめ)には桜井屯倉と田部を、物部木蓮子(いたび)大連の娘宅媛には難波の屯倉と田部を賜うよう」奏した。

④元年二月・天皇は大伴金村を従えて三島に行幸した。縣主飯粒(いひぼ)に良田を求めたところ、飯粒はよるこんで竹村(たけふ)の地四〇町を献上した。良田を献上しなかった大河内直味張は田部を天皇と大伴金村に差し出して命乞いをした。三島の竹村の屯倉が河内の県の部曲(かきべ)を田部と

する元となった。

⑤元年二月・廬城部(いおきべ)連枳莒(きこゆ)の娘の幡媛が、物部大連尾興の瓔珞(おうらく)首飾(しゆしやく)を盗み取つて皇后に献上したことが發覚し、枳莒は安芸国の廬城部の屯倉を献上した。物部大連尾興は事が自分に由来するのをおそれて、十市部、伊勢の来狭々(くささ)、登伊の贄士師部(にえはじべ)・筑紫の膽狭(いさ)山部を献上した。

⑥元年二月・武蔵の笠原直使主(おみ)と同族の小杵(おき)とが国造の地位を争い、使主は朝廷に助けを求め、国造となつたお札に横淳(よこぬ)・橘花(たちばな)・多氷(おおひ)・倉櫟(くらす)の四箇所の屯倉を献上した。

⑦二年四月・勾(まがりの)舍人部・勾(ゆき)部を置いた。

⑧二年五月・筑紫の穂波の屯倉・鎌の屯倉・豊国の勝崎(みさき)の屯倉・桑原の屯倉・肝等(かた)の屯倉・大拔(ぬく)の屯倉・我鹿(あか)の屯倉・火国の春日部の屯倉・播磨国の越部(こしべ)の屯倉・牛鹿(うしか)の屯倉・備後国の後城(しつき)の屯倉・多禰の屯倉・來履(くくつ)の屯倉・葉稚(あな)の屯倉・河音(かわと)の屯倉・婀娜(いな)の屯倉(備後国の現福山市辺)・膽

殖(いにえ)の屯倉・阿波国の春日部屯倉・紀国経淵(ふち)の屯倉・河辺(かわへ)の屯倉・丹波国の蘇斯岐(そしき)の屯倉・近江国の葦浦の屯倉・尾張国の間敷(ましき)の屯倉・入鹿(いるか)の屯倉・上毛野国の緑野(みどの)の屯倉・駿河国の稚贄(わかにな)の屯倉を置いた。

⑨二年八月・国々の大養部を置いた。

⑩二年九月・桜井田部連・県犬養連・難波吉士らに詔して、屯倉の税をつかさどらせた。

⑪二年九月・大連に勅して、「牛を難波の大隅島と姫島の松原に放せ。願わくば名を後代に残そう」といった。

安閑は二年二月に勾の金橋の宮で崩じたと記されていますが、在位中のエピソードはほとんどすべてが屯倉の設置にかかわるものです。屯倉設置にかかわる各年代のエピソードがすべて安閑紀に収められているという見方が正しいと思われます。しかし、屯倉の話が集約されている理由は、実際に安閑期に屯倉設置の大きな動きがあったからだと考えられます。二年五月に設置された屯倉の中では、筑紫の屯倉が先頭に記されています。私には磐井の乱によって新たに支配した磐井又はその同盟者の領地を、安閑が直轄支配し始めた史実が背景にあるのではないかと思います。さらに、各地の屯倉の話の中で、継体陵のある三島(大阪府高槻市・茨木市)の屯倉設置の話が大きな分量を占めていることにも注目すべきと思われます。継体が拠点としていた淀川水系



は、安閑期においても引き続き重要な拠点であり続けたのではないかと想像出来ます。

宣化紀の大半は「隠された歴史(8)」において考察した那津官家設置の話です。私はその話の中に那津官家への遷都準備が隠されているのではないかと考察しました。すなわち、継体・安閑・宣化は淀川水系を拠点としながら、筑紫征服と筑紫を拠点とした全国支配を進めた。蘇我馬子はその史実を隠し、自らの拠点である大和飛鳥の地に近畿天皇家の宮が継続して置かれていたという史実とは異なる歴史をねつ造した。そして、近畿に残され蘇我稲目の娘と婚姻した安閑の子を「欽明天皇」に仕立て、「大和にいた天皇家の一元支配」の歴史を創作した。日本書紀はそれに追従した。私はこのように考えます。

## 「道をゆく」(18) 成瀬和之

### 「熊野街道」(五)

「大仙陵古墳」の南端から御陵道を西へ向かい、国道二六号線を超えた右側に南宗寺(なんしゅうじ)があります。

南宗寺は堺第一の禅宗寺院として堺町衆の文化向上に大きな役割を果たしました。一五五七年の開山ですが、戦国大名の三好長慶の深い帰依により、大寺院に

発展しました。一六一五年の大坂夏の陣で市街とともに焼失しましたが、当時の住職であった沢庵和尚らによって再建されました。さらに一六一七年將軍徳川秀忠が寺領を寄進し、一六二三年、秀忠や家光が堺に来て、座雲亭に登り、堺の街の復興ぶりを視察しています。

堺の茶人たちは、みなこの寺で禅を学び、禅の道に励んだと言います。千利休(千宗易)もその一人で、織田信長や豊臣秀吉に仕えました。利休好みの茶室「実相庵」は、一九六三年に再建され、枯山水の方丈前庭(国名勝)も復元されました。千利休一門の供養墓碑もあります。

御陵通と並行する南宗寺裏の流れは、旧市を取り巻いていた土居川が埋め立てられずに残ったもので、昔をしのぶ堺の「環濠」跡として貴重です。堺の街は濠で囲まれていました。堺の名が京の都に広く知られるようになったのは、熊野詣の通路となつてからで、さらに、南北朝時代に日明貿易など海外貿易で港として栄え、室町時代には町民の自治が認められていました。そして市街の北・東・南を濠で囲い、傭兵を置いて町を戦乱から守っていたのです。

戦国大名の中で全国統一の願望を最初に抱き、実行に移したのは尾張の織田信長でした。信長の最大の敵は、同じ封建主義に立つ戦国大名ではなく、石山本願寺を頂点とする一向一揆、そして堺の自治都市でした。ついに一五六九年織田信

長に屈服して、自由都市・堺はつぶされてしまいました。そして自治都市の象徴であった「環濠」も埋め立てられていきました。堺の豪商出身の千利休が自殺に追い込まれたのも、封建主義に立ち、「豪華」「絢爛」を好む豊臣秀吉と根本的に相いれなかったからと思われます。

土居川に架かる山ノ口橋は、熊野街道の出入口でした。山ノ口橋から熊野街道を南下して行くと、国道二六号線と二度目に交差するところに石津神社があります。古墳築造の首長として活躍した石津連(むらじ)の祖神を祀る神社です。

その少し南には石津川が流れています。「大仙陵古墳」をはじめ百基もの古墳が集まる百舌鳥野の古名は、石津野でした。古墳に使われた巨石は、すべて石津川に入り、その支流の百済川で運び上げられたと言います。これらの石が集まるので石津川と名づけられたということです。

石津神社には、与謝野晶子の石津川にちなんだ二つの歌の歌碑があります。与謝野晶子は、堺の老舗和菓子商に生まれ、堺区立堺女学校(現大阪府立泉陽高等学校)に学びました。

二つの歌とは、  
「人とわれ おなじ十九の おもかげを うつせし水よ 石津川の流れ」  
「石津川 ながれ砂川 髪をめでて なでしこ添へし 旅の子も見し」です。  
石津川は、大きな川ではありませんが、かつては蜚の飛び交う、大阪一美しいと

も言われた清流であったそうです。

堺市役所の北五〇〇メートル程のところにある晶子の母校、泉陽高校には、日露戦争に召集された弟にささげた長詩「君死にたもうことなかれ」の冒頭部分  
が書かれた詩碑が立っています。

「あゝをとうとよ君を泣く  
君死にたまふことなかれ  
末に生まれし君なれば  
親の情けはまさりしも  
親は刃をにぎらせて  
人を殺せとをしへしや  
人を殺して死ねよとて  
二十四までぞだてしや」  
元特攻隊所屬の衛生兵だった、今は亡き義父に「戦争とは何ですか」と聞いたことがありました。「戦争とは、殺し合いだよ」との義父の返答が、ふと思い出されました。

### 編集後記

SK生

やっと秋が来た。近所のあぜ道には曼珠沙華が咲き、遠い秋の雲に萩の花がゆれている。だがコロナ禍とあって友人との交じらいはいまだ思うように任せぬ。亡き友のために「秋草をこつたに束(つか)ね供えけり」と詠んだ久保田万太郎に「度外れの遅参のマスクはづしけり」という句がある。思わずニヤリとさせられる諧謔の句であるが先の見えぬ不安を和らげるのはこうしたユーモア。エスプリに満ちた笑いが今こそ欲しい。

## 永遠の嘘を信じてくれ

あれは寒い二月の末だった。その丁度半年後には、結局は二度目の政権放り投げを仕出かさざるを得なかった男が、突然、三月二日(月)から小中学校などの全国一斉休校をお願いすると言いだした。今に続く新型コロナウイルス感染症問題に国中、世界中が揺れるさなかのことだった。ほとんどすべての学校が休校に突入した。

学校だけではない。いつしか若い若きも「自粛」生活に追い込まれていった。花も実もあるかに見えたこの国には、実のところは根も葉もなかったであろう、世間は急速に疲弊して行つた。学校では学年末から新年度の五月下旬まで、行われるはずのことが行われぬか、異常なカタチで行われた。それは今も続いている……。

そういう人間世界の変動は、水の中に居てもわかるものである。子どもたちはどのように学校を巣立ったか、また新しい学校での出会いはどうだったか。私は水の中に居て、そういうことに思いを馳せ、随分昔に人間から聞いた卒業の言葉を思い出していた。

……卒業おめでとう。

いま私は、皆さんの卒業を心から祝福している。しかし同時に私は、いま皆さんが飛びたつ世界が希望に満ちているわけではないことを考える。愚かしくもやりきれないあまたの事実にあふれた世界

は、しばしば私たちをどうしようもない不安や絶望にかりたてる。そんな世界のただ中において、人間が学ぶとはどういうことか、人間が生きる幸せは何であるかなどと問い語ることは、ほとんど嘘をつくことに等しいかも知れない。

しかし、考えてもみよう。この世界も、この嘘も、いまにはじまったわけではない。人類が、はじめは無意識のうちに、やがては意識的に他の動物と区別して自らを人類と呼んだときから、私たちの世界ははじまり、嘘が生れた。だから、この嘘はただの嘘ではない。世界のはじまりから今日まで、人類の歩みを、それを進歩といわないで何が進歩であるう人類の進歩を支えてきた永遠の嘘である。

誤解してはいけない。人間が求める力と富は、それだけで正義なのではない。力と富は、卑劣で卑怯な支配を生むことがある。自由は、それだけで尊いのではない。自由は、自他ともに認め合わなければ、抑圧を生むことがある。臆病で弱いことが常に悪でないのは、勇敢で強いことが常に善でないのと同じである。それにしても、矛盾に満ちた世界をどうするといふのか。

永遠の嘘は、こう答える。何であれこの世界に存在すること、そこにあることにはそれだけで深い意味がある。その意味を知らなければならぬ。地上に存在するものはすべて、互いが互いの一部なのだ。

『人は知らないものを深く愛すること

ができる、しかし愛さないものを深く知ることにはできない』

世界と自己に対して深い関心をもつこと、世界を知り自らを問うことだけが私たちを支える。

人間は、ふつうであること、あたりまえでいることが一番美しい。

それが嘘にも聞こえるのは、それが一番難しいことであるからだ。

永遠の嘘を信じてくれ。

世界はいつでも不透明で、混沌としている。しかし、先の見えない不安を恐れることはない。先の見えない不安は、先の見えてしまった不幸よりむしろ笑ってくれ。夢や希望は、遠くにあるのがいい。追いついてしまえば、それはもう夢でなくなる。希望でなくなる。そう思っていればいい。

永遠の嘘を信じてくれ。

ともに学んだ諸君の、幸せな誇りある人生を祈る。

……

コロナ後の世界のありようについて、「新しい日常」とか、「新しい生活様式」などというものが言われているらしい。

人間はどうも、そういう言葉になびきやすいものらしい。何が新しいのか、わからない。

「共生」などはある意味でその典型かもしれないと考えていたとき、恐ろしい記述を見た。それは、先の沖縄戦の最中に、日本軍が記録した文書にあった。

「…軍と民は…共生共死の一体化の…」

確かに、沖縄県民は友軍であるはずの日本軍と行動を共にして逃避行を続ける中で数えきれない犠牲を重ねたのだ。沖縄に国との「共生共死」を求める思想、その構図は今なお変わっていないのかもしれない。言葉は時に疑ってかからねばならない。

共生は共死にもなる国の闇

## 俳句

土田 裕

朝顔の水やり頼む旅用意  
辛き言ふまでに間のあり唐辛子  
台風地球は狭くなっており  
秋風や体の不調一つ増え  
露の世の露に等しき余生かな

影山 武司

山音の水音の満つばつたんこ  
伝言の擦れ違ひをり吾亦紅  
雑踏に踵を返す秋の風  
馬追の闇しならする音色かな  
ひらがなの絵手紙届く菊日和  
スマホ見て独り笑ひや穴惑  
プラタナスの葉裏の白き素秋かな  
草の花木喰仏の笑み零れ  
腹這ひに地図を眺むる夜の長し  
手の平に青き香残る酢橘かな